

主の降誕 日中のミサ

2019.12.25

第一朗読 イザヤ 52・7-10

第二朗読 ヘブライ 1・1-6

福音朗読 ヨハネ 1・1-18

カトリック高円寺教会 10時ミサ

主任司祭 吉池好高神父

クリスマスの夜が明け、朝の光の中でわたしたちは教会が祝うクリスマスの日中のミサに参加しています。朝の光の中で、あのベツレヘムの馬屋でマリアとヨセフが迎えたであろう、新しい朝の情景を思い浮かべながらこのミサをささげたいと思います。マリアとヨセフにとって、あのクリスマスの夜が明けて迎えた次の日の朝は、それまで経験したこのない全く新しい朝であったに違いありません。産まれた子を布に包んで飼い葉桶に横たえなければならなかったあの夜、マリアとヨセフはどのように過ごしたのでしょうか。夜が明けて差し込む朝の光の中で、あらためて、飼い葉桶の中のその子の顔に見いった時、マリアとヨセフの心はどのような喜びに包まれたことでしょうか。マリアとヨセフは直感的に悟っていたに違いありません。彼らの心の底から突き上げ、彼らの全身を包むこの喜びは、産まれたその子が、神のもとから彼らにもたらしてくれた喜びであることを。マリアとヨセフを包むこの喜びは、わたしたちにも窺い知ることが出来ないものではありません。人の子の親となった経験を持つ人は皆、あのクリスマスの夜が明けた朝の経験をしているはずです。

マリアとヨセフが迎えた朝の光は、ベツレヘムの町に住む人々の上にも降り注ぎ始めていたことでしょうか。けれどもベツレヘムの人々が迎えたその朝の光は、わたしが迎える多くの朝のように、いつもと変わることのない朝の光です。そのいつもの朝の光の中で、わたしたちがささげているクリスマスの今朝のミサは、マリアとヨセフを包んだに違いない、天来の真の喜びの光へとわたしたちを招いています。教会のクリスマスの祝いは、もちろんイエス・キリストの誕生を祝う祝いですが、その真の意味は、あのクリスマスの夜、ベツレヘムの馬屋にお生まれになった神の子イエス・キリストが、今朝もいつもの朝を迎えているわたしたちにもたらして下さった神のいのちの輝きを祝うことにあります。

その神のいのちの輝きについて、今朗読されたヨハネ福音書は次のように語っていました。「命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中に輝いている」。クリスマス之夜、ベツレヘムの馬屋に産まれたマリアとヨセフの子がわたしたちにもたらしてくれたのは、このような光であるとヨハネ福音書は語っているのです。

あらためて、聖書を開いて、ヨハネ福音書の初めから読み直してみると、次のように語られています。「初めに言(ことば)があった。言は神と共にあった。言は神であった。・・・言の内に命があった。(そしてその)命は人間を照らす光であった」。マリアとヨセフを包んだ喜びに満ちた光は、お生まれになった嬰兒のいのちの光です。そのいのちの光は、天使ガブリエルを通してマリアに告げられた神のことばがもたらしたいのちの光です。それはまた、ヨセフに夢の中で語られた神のことばがもたらしたいのちの光です。さらにそれは、このクリスマス、聖書を通して語られる神のことばを信じて、救い主の誕生を祝っているわたしたちをも包んでいるいのちの光です。クリスマスを祝うわたしたちの喜びは、聖書が語るあの嬰兒がそのいのちをもってわたしたちにもたらしてくれた、いのちの光に包まれる喜びです。マリアとヨセフ、そして、ここに集うわたしたちを包む、お生まれになられたイエス・キリストがもたらしてくださった、いのちの光の喜びの源は、ヨハネ福音書が告げているように、神のことばにあります。その神のことばは、天地創造のはじめに響いた「光あれ」という全てのいのちの創造主である神のことばです。しかし、ヨハネ福音書が語ることはそこで終わってはいません。

「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た」。ここにヨハネ福音書が告げるクリスマスの喜びの源である、究極のいのちの光の本体が示されています。神のことばは肉となってわたしたちの間に宿られた。そのことによってわたしたちは神ご自身である、神のことばの栄光の光を見ることが出来たのです。クリスマスを祝うとは、ヨハネ福音書が告げる、神がそのことばによってわたしたちのうちに実現してくださったこのような壮大な神の愛のドラマを味わうということです。

この神の愛のドラマを理解し、味わうためのキーワードは、「初めに言があった」と語りだされている「神の言」です。なぜヨハネ福音書は、その書き出しの冒頭に、「初めに言があった」と語っているのでしょうか。ことばは神だからです。神はことばだからです。神ならざるわたしたちのことばも不完全ながらも、自分の心の内を外に向かって表明します。内なる思いはことばとなって外

に向かって吐露され、波紋を広げてゆきます。その波紋の広がる場所、わたしたちは自分が発したことばの責任を問われることとなります。神ならざるわたしたちの限界は、わたしたちの発することばが、わたしたちの内なる思いを裏切るということです。そしてまた、わたしたちは誰も、自分が発したことばの責任を完全には負いきれないということです。人間は自らのことばを裏切る存在です。そのような者として、わたしたち人間はことばになりきることが出来ない存在です。神がことばである理由はここにあります。その証が、ことばによる天地万物の創造であり、神のことばそのものであるお方が肉となってわたしたちの間に宿られたことです。先ほども言ったように、ことばは内なる思いの表明です。神のことばは神の内にある神の思いのあらわれです。

神のことばによる天地万物とそれを満たすいのちの創造は、この世界とその中に生きる全ての者がそこに存在し、そこに生きることを願うことばとして表明された神の内なる愛の思いの現われです。神よってその存在を与えられたこの世界と、そこに住むわたしたちの間に、わたしたちと同じ肉を持つ一人の人間として宿られた神のことばは、わたしたちへのこれ以上にはない、神の愛の想いを表明しています。ここに神の栄光の光が輝いていると、ヨハネ福音書は告げているのです。

ベツレヘムの飼い葉桶の中に眠る幼子において、このような神のことばが宿っており、その幼子として宿った神のことばの荘厳な栄光の光が、今わたしたちを包むこの世界の暗闇の中に輝いていると、ヨハネ福音書のクリスマスのメッセージは告げているのです。そればかりではありません。そこに宿った神のことばは、それを受け入れたわたしたちを、あの幼子のいのちそのものに与らせてくださるために、わたしたちをその神のいのちに招き入れるために、そこに息づいていると告げているのです。天地万物の創造から始まる神のことばの全歴史は、それを目指しているとヨハネ福音書は、わたしたちに告げているのです。

光を受け入れるとは、光に同化するという事です。わたしたち自身が光にならなければ、光を受け入れることは出来ません。光としてこの世に宿られた神のことばは、そのような仕方で、つまりわたしたちを彼と同じ光に包まれたものとするためにわたしたちの中にお出でくださったのです。わたしたちにはまぶしすぎると思える、このような神のことばのわたしたちへの受肉を願って、このクリスマスの神秘をともに祝いたいと思います。